

活動報告書

報告者氏名：岡田 さゆり 所属：滋賀県立野洲養護学校 記録日：平成26年2月28日

【対象児の情報】

- 学年 小学部1年生
- 障害名 自閉症 知的障害
- 障害と困難の内容
 - ・不安傾向がある。初めてのことや大きな声が苦手であり、教師にしがみつくと、教室の隅でうずくまるなどの直接的な行動で表す。
 - ・経験した事柄や知っていることについては1～2語文での理解が可能である。そうでないことについては、話し言葉のみでは理解がしにくく、絵や写真、ひらがな単語を添えると理解が可能である。
 - ・筆記用具を持って描くことに苦手意識がある。

【活動目的】

- 当初のねらい iPad というツールを用い、自分にとって必要な情報を得たり一人で操作・表現したりする活動をすることで、自分から行動し、安定して過ごす時間を増やす。
- 実施期間 平成25年5月～平成26年2月
- 実施者 岡田 さゆり (教諭)
- 実施者と対象児の関係 学級担任

【活動内容と対象児の変化】

- 対象児の事前の状況
 - ・状況の変化への対応に困難がある。幼稚園生活から学校生活への移行の時期である。新しい場所や他の児童の動きに戸惑いや不安を示し、泣くことがある。学校では、特に気に入ったものや集中できるものが少なく、周囲に注意が行きやすい。
 - ・登校後、他の児童が教室内を動いている間は教師のそばにいる。他の児童の動きが気になり不安なため、教室の隅にうずくまったり寝転がったりして一人で過ごすことも多い。
 - ・手の操作が未熟であり、特に筆記用具を用いることについては苦手と思っている。描くことに抵抗を示したり、描いたものを見て「できない」と訴えたりする。
 - ・帰宅後などに、保護者が本児に学校でしたことを尋ねてもほとんど話さない。
- 活動の具体的内容

5月～7月は、iPadの導入の期間とし、iPadに親しむこと、iPadでどんなことができるかが分かることを目標に活動をした。画面を直接指で触る活動は、予想以上に本児の表現する意欲を引き出すことができた。そのため、9月～2月は、筆記用具で描くことにつながることを、iPadを使って話をすることを目標に、以下の活動をした。

 - 1 好きなものや学習の写真、動画を撮影したものを見る。
(「写真」「iフォトアルバム」アプリ)
 - 2 興味・関心のあるものの写真を撮影し、他の人に見せ伝える。
(「カメラ」「写真」アプリ)
 - 3 むり絵、パズル、なぞり書き等のアプリを用いて、手先を見て操作し、表現の楽しさを経験する。
(「空想どうぶつ」「ナゾルート」「モジルート」「にほんごであそぼ」「ひらがなおけいこ」「Yum Yum パ

ズル」アプリ)

4 手順表、ホームページから必要な情報を得て、活動に取り組んだり話をしたりする。

(「iBooks」「Safari」アプリ)

○対象児の事後の変化

<活動の具体的内容1について：登校後の時間が楽しみになった>

4月に入学して以来、登校後の時間は最も不安な時間帯であった。安心につながるものはないかと思案していた。5月中旬、本児の好きな新幹線、担任が新幹線に乗ったことが分かるような写真や動画を撮影したものを「写真」アプリで見せたところ、



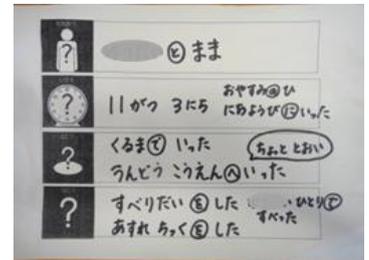
本児は画面に注目し、笑顔で話し始めた。「〇〇系」「〇〇は△△新幹線」等、新幹線に関する知識をたくさん披露し、担任の質問にも嬉しそうに答えた。また、担任がタップ、フリックする様子をすぐにまねて自分でもしようとした。直接手で触れた画面が変わり、見たい写真を自分でどんどん選んで見ることが楽しく、非常に意欲的に活動した。登校後、教室の隅へ行くこともなくなり、iPad を楽しみにし、「トイレ行ってきまーす」とはりきってトイレに行った後、iPad を使うことも見られた。担任は、「iPad は本児にとってぴったりのツールになる」と予想し、主に登校後に iPad を使う時間を持ち、本児の実態に即したアプリを入れた。

<活動の具体的内容2について：写真を見ながら伝えることが増えた>

担任のすることと同じことをしたいと思うようになり、6月には、本児に iPad を渡し、カメラマンになってもらった。初めて撮影した担任の写真には、顔ではなく、手や体のみ映っていた。画面を見せて、「先生が真ん中だよ」と教えると要領が分かり、それ以後は人物を正しく撮影するようになった。「カメラ」アプリは、ファインダーが大きく、撮影するものを確認しやすいので、本児にとっては非常に分かりやすかった。自分から、「お空写す」と言って撮影したり、「バス写したい」とその場がないものを撮影したいと言ったりした。この活動によって、本児の関心のあるものを担任がより知ることができた。また、撮影した写真を、別の教師や児童に見せて話をするようになった。



10月後半から、月2回程度、金曜日に iPad を家庭に持ち帰った。授業の動画や写真を見て、習ったダンスをしてみせたり、学校のことを話すことが増えたりした。休日に撮影した写真を担任に見せ、「ぼく、カメラマンになった。パパだよ」と伝えた。11月には、休日に出かけたことについて、写真を見ながら、「だれ」「何をした」といった事柄について、2語文で伝えることができた。

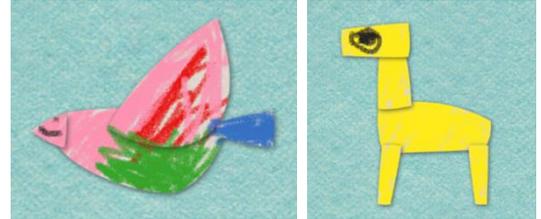


<活動の具体的内容3について：自分から書き、描くようになった>

本児は、手の操作が未熟であり、鉛筆やペンを使って描いたものを見て「できない」と言うことが多く、苦手意識を持っていた。筆記用具を持つことを避けるような様子も見られた。そのため、筆記用具

で描く活動をせず、iPadのアプリを用いて、指先をできるだけ使うこと、描く手と支える手を作ること、自分で表現することの楽しさを経験することをねらった。

(1) 筆記用具によるぬり絵では、いくつかの線のなぐり描き程度であった。「空想どうぶつ」アプリでは、自分で色を選んで、いろいろな動物を塗ることができた。自分のイメージと異なる時には、「できない」と訴えるのではなく、消しゴム機能を使って簡単にやり直すことができ、満足の作品を作り、成功体験が増えた。9月頃から、色を塗るだけでなく、小さな目をかき入れる等細かいところも表現するようになった。完成したものには、鳴き声を録音することができ、犬や鳥の鳴き声を考え自分の声で録音したものを後で聞き、楽しむようになった。当初は、右手だけを使っていたが、左手でiPadを支えるようになった。紙を左手で押さえ右手でのりを付ける等、他の場面でも、両手機能の分化が見られた。



(2) 筆記用具に適度な力を入れ支えながら動かすことに困難があり、5cm程度の線を描くことも難しかった。本児が好きな乗り物を用いた「ナズルート」「もじルート」アプリで、指先でやや細かい線を描く、細いところをなぞるといった活動をした。その結果、10cm程度の直線（縦、横、斜め）を筆記用具で正しくなぞるようになった。

(3) 文字なぞりは「にほんごであそぼ」アプリを用いた。自分で好きな色を選んで文字を書けることが大きな動機づけになり、書く文字を声に出しながら、ゆっくり指を動かし、丁寧に書いた。文字を指でなぞって書くことが楽しく、自分からこのアプリを開いて書くこともあった。6月初めのグループ学習では、他の児童が鉛筆で文字のなぞり書きをする様子を見て、「先生、持って。手伝って。」と一緒に鉛筆を持って書くことを求めた。鉛筆によるなぞり書きは、書き順を色別で示したものを準備し、いつでも取り組めるようにした。6月末には、自ら鉛筆を持ち、初めて一人で文字をなぞった。7月には、学習で用いた言葉や行事で体験した事柄に関する言葉を意欲的になぞるようになった。グループ学習では、他の児童といっしょに書く活動ができるようになり、本児も他の児童もより意欲的に学習し、書いたものをお互いに見せるようになった。鉛筆で書く機会が増えたことに合わせ、文字なぞりアプリを「ひらがなおけいこ」アプリに変えた。このアプリは、一画ごとに線の色を自分で変えることができ、鉛筆で文字なぞりをする場合と同じような感覚で取り組むことができた。一画一画を意識し、指先に適度な力を入れて書くことができた。



授業の内容や日々の生活の様子に即して、上記の(1)～(3)の内容を組み合わせ、ほぼ毎日15分程度取り組んだ。本児は、学校生活に慣れ、他の児童の書く様子を刺激を受け、理解できることや安心できる場面が増えたこともあり、筆記用具による表現を自分からするようになった。11月には、家族で出かけた時に印象に残ったものをサインペンで紙に絵で描

いた。他の児童が絵を描く様子を見て、「ぼくもかく」と言い、初めて自分から体験を絵で表現し、「これはきょうりゅう」「これはおにぎり」と伝えた。2月には、大きなホワイトボードに「おかだせんせいってかくね」と自分から言い、それらしく文字を書き、続いて魚や花の絵を話をしながら大きく描き、「できたよ。これは魚」と笑顔で担任に伝えたり、絵描き歌らしいものを歌いながらピラニアの絵を描いたりした。とても満足する出来栄えだったようで、「消したくないよ」と訴え、写真を撮影して残すことで納得した。

<活動の具体的内容4の活動について：ほしい情報を得ることができた>

(1) 体に関わる様々な検査は、なじみのない場所、なじみのない人、突然体に触れられる等のことから苦手である。身体計測、眼科検診等すべての検査手順のPDFファイル(Dropsのファイル)をiBooksアプリに入れ、事前に見せた。苦手な活動を得意なiPadというツールの中で見ることで、抵抗感が減った。検査中は緊張しながらも、「次、〇〇」と言いながら見通しをもってできた。また、別の日には、「iPadで検査見よう」と言い、iPadを自分で持って保健室まで移動し、受ける検査のファイルを開き、手順を確認した後、落ち着いて検査を受けた。



(2) 9月に、夏休みの体験を振り返り、伝える学習をした。家族で出かけた遊園地のパンフレットとキーワードを記入するワークシートを用い、2～3語文の簡単な質問に答えながら話のやりとりをした。自分が乗った乗り物をパンフレットで見つけ、「これこれ、こんなの」と手を動かして伝えようとした。そこで、「Safari」アプリで、遊園地のホームページを開き、その乗り物の写真や解説を一緒に見ることで、担任もイメージを共有して話を聞くことができた。「これこれ、〇〇」と乗り物の名前を言い、写真を指さしながら「こんなに高いんだよ。ここが、回るの。ばあちゃんと乗った」と楽しかったことをより詳しく伝えられた。そして、自分の印象に残ったもの写真やイラストを開き、話をすると、他の児童も一生懸命話を聞き、「わー、すごい」「これはどうするの」等と話のやりとりができた。このような使い方は、ほしい情報をすぐに取り出してタイムリーに話ができるという点でよかった。本児との話のやりとりで出てくる、外出先やテレビ番組のキャラクター等、こちらでは把握しにくい情報を、こうして補うことで、あきらめずに生き生きと話を続けることが増えた。

【報告者の気づきとエビデンス】

○主観的気づき

- (1) 本児にとって、iPadは安定のツールになったことをきっかけに経験を広げられたのではないかな。
- (2) 直接指で画面に触る活動を積むことで、自分の手で表現することが楽しくなり、自己肯定感が高まったのではないかな。
- (3) iPadを使うことで、できることが増え、他の人に見せたり教えたりする等、これまでと異なる人との関係ができたのではないかな。
- (4) iPadを家庭と学校で共用することで、時、場、人を越えたコミュニケーションの広がりが見られたのではないかな。

当初は、気持ちの安定のツールといったねらいが中心で取り組み、早い時期にねらいが達成できた。直接指で画面に触ることで画面を自由に変化させられることの楽しみが増し、7月頃からは、上記(2)に関する担任の気づきが多くなり、予想以上に、本児の表現活動に広がりが見られたと感じる。

○気づきに関するエビデンス

(1) 入学当初、登校後の時間帯は、教室内では人の動きが多く、突発的な出来事もあり、不安で動くことができなかった。iPad で好きなものの写真を見ている間は、周囲の動きや声が気にならず、集中しできた。登校後、短時間このような時間をとることで、それまでできなかった朝の荷物の整理やトイレといった活動を自分からするようになり、生活のリズムができた。

(2) 筆記用具を持つこと自体を避けていたが、自分から進んで持ち表現する機会が増えた。「○○かく」と描きたいものを伝えてから描いたり、できあがりを楽しそうに見せ、堂々と話をしたりした。筆記用具を使って表現したものの変化は下表のとおりである。

	きっかけ	描いたものとその時の行動
4 月	教室壁面のホワイトボードに複数の児童が絵を描いていた。担任が本児を誘い、30 cm×50 cmのスペースを与えペンを渡すと描き始めた。	 <ul style="list-style-type: none"> ・担任に誘われ、指示されたことをするという行動であった。 ・手のひらの中でペンがグラグラ動き、持ち方は不安定だった。 ・自由に色々な曲線を描き、短時間で「おわり」と言い、ペンを担任に返し、その場を離れた。
11 月	他の児童が「(絵)かく」と言ったところ、「ぼくもかく」と言った。はじめにA6大の紙を渡すと楽しそうに描き、一枚の紙に一つ描くといった様子で、できると「紙ちょうだい」と次の紙を要求した。4枚目からはB5大の紙を渡した。	 <ul style="list-style-type: none"> ・休日明けの日、家族で外出したこと（恐竜博物館や公園）を表現した。ペンを握りしめ力を入れて描いた。一枚目（右上）はペンで色を付けることを楽しんだ。2枚目を渡すと「おー」と喜びの声を出し、「これ、きょうりゅう」「おにぎり」と次々と描いた ・家庭に絵を持ち帰り、家族に見せ話すことができた。
1 月	正月の勉強で書初めをした。書きたいことばを選ばせた。紙には、普段と同じように書き順を色別に示した文字で下書きをしておき、筆でなぞらせた。	 <ul style="list-style-type: none"> ・「かく、かく」と言い、自分から筆を持ち、下書きの線をじっと見ながらゆっくり筆を動かした。親指と人差し指を対抗させて筆をしっかり握った。

<p>2月</p>	<p>担任がホワイトボードの前で次の授業の準備をしている時に寄ってきて、「ぼく、かく。おかだせんせいってかくね」と目の前にあるペンを持ち、書き始めた。</p>	  <p>・「おかだせんせって書いたよ」と担任に見せ笑った。「次は魚」お花もあるよ」と一つ一つ描いては担任に伝えて笑顔で続けた。ペンの動きはスムーズで、描いたものがはっきりと伝わる。</p>
-----------	---	---

(3) 本児が iPad をしている様子を見た他の児童が「〇くん、すごい」と本児のできることを発見することができた。「教えて」と言われ、「こうして、こうして、ほら、こうするんだよ」と、iPad の操作を教える機会が増えた。グループの学習では、書いた文字を他の児童と見せ合い、質問したり答えたり、言葉でのやりとりが見られるようになった。



(4) 当初は、学校であったことを家庭ではほとんど話さなかった。iPad の写真や動画といった手がかりを使うことで、学校のできごとを話すようになった。家族は「(本児の) 言葉の足りない部分を写真や動画を見ることで理解でき内容も共有できた」と実感しておられる。

【今後の方向性】

(1) 4月からの生活の大きな変化に対応させるために、まず特定の教師とのやりとりの中で気持ちの安定を図り、活動を広げ、学校生活に慣れてきた。今後は、同様の活動を別の教師ともできるようにしたい。そのために、教師側の iPad の使用等に関する不断の研修や共通理解をしていくことが課題である。

(2) iPad のなぞりや描画では、色を選ぶことができるものが多い。自分で選び、決定する機会が自信につながった。自分で表現することを楽しみ、文字を書くようになったことは大きな変化だった。「ぼくもかける!」「できたよ。見て見て」「ひとりでかいたよ」といった達成感や自己肯定感につながったことは最大の成果である。将来の文字学習のために、自分の手で様々な形で表現する体験を積ませたい。

(3) 学校と家庭で、共有した写真や動画を手がかりに話をする機会を増やしたい。休日の話を聴き取り、保護者に内容を確認すると、正しく伝えており、中には「こんなことも話すんだ」と保護者が感じられたこともあった。伝える相手、伝える内容を広げ、コミュニケーションをより豊かなものにしたい。

